

「ハリー・ポッター」シリーズにおける笑い ——Fred と George の場合——

三池 洋江

はじめに

本論文では、J. K. Rowling 著「ハリー・ポッター」シリーズを取り上げる。本シリーズに登場する双子の Fred Weasley と George Weasley に着目し、本シリーズにおける笑いを通して発信されるメッセージを読み解いていく。「ハリー・ポッター」シリーズは、その人気の高さから、なぜ読者に本シリーズが受けてきたのかという点で論じられることが多い。そのような論調の中では、様々な菓子や魔法アイテムの魅力や学校生活を扱ったことによる読者の共感の獲得が主に論じられてきた。それに加え、本シリーズが読者の笑いを誘うような工夫がなされていることも指摘されている。富山太佳夫は「連作のいたるところで読者を笑わせるように工夫している」（富山 2003, 12）と述べ、小谷真理は「ユーモア感覚にあふれている」（小谷 2002, 11）点が本シリーズの魅力であると分析している。北爪佐知子は、本シリーズの人気の理由を優越性の理論、放出の理論、ズレの理論というユーモアの三大理論に当てはめ解釈している（北爪 2004, 228）。しかしながら、こうした先行研究は、本シリーズが読者にもたらす笑い、そこから生まれる本シリーズの人気の秘密を明らかにする内容に留まっている。後述することになるが、本シリーズにおいて笑いは読者の獲得に重要なだけでなく、登場人物においても重要なものである。

本論文では、読者が受け取る本シリーズの笑いではなく、登場人物間で交わされる笑いのキャッチボールに着目したい。登場人物間での笑いに着目する際、他の登場人物に笑いを与える役割として最初に挙げられる人物は、主人公 Harry Potter の親友 Ron Weasley である。主要登場人物である Ron の役割として、中村圭志は①魔法界の常識の伝達役、②お馬鹿さん、③ナンバーツォー的人生という三つを提示している（中村 2010, 251）。①では、マグルの中で生活していた Harry に魔法界について教える役目、③では、リーダー役を担う Harry とは異なる生き方を読者に示す Ron の役目が指摘されている（中村 2010, 251）。②においては、Ron が間抜けな発言をすることにより、Harry や Hermione Granger、読者に息抜きの効果が与えられる（中村 2010, 251）。Ron は、間抜けな発言によって周囲の人物に笑いをもたらす存在で

ある。また、自らが面白い発言をするだけでなく、周囲の人物をからかい、おちよくとくという役目も持っている。Ronが周囲をからかい笑いを生み出す点は、FredとGeorgeとの共通点であり、双子とRonが似た者兄弟であることを示している。しかしながら、双子はRonのように自らの間抜けな発言で周りに笑われるということがほとんどないため、両者には差異がある。さらに、作中では、Harryへの劣等感や大家族の中での苦勞といったRonの多様な側面が描かれている。物語の主要人物として多くの場面でRonが登場し、様々なRonにまつわるエピソードが描かれることがその理由であろう。笑いをもたらすことはRonの役割の上で大きいと言えるが、笑わせる役目として必ずしも一本化されているとは言えない。中村が指摘した複数の役割を担い、苦悩を抱える人物としてRonは描写されている。だが、Ronの兄である双子のFredとGeorgeは、笑いをもたらす役割がRonに比べ、作中で強調されている。木梨由利は、「主人公たち以外にも、魅力的な人物は多く、例えば、ロンの双子の兄たちは、勉強しないのに成績優秀、おまけにクイディッチの選手という得な役回りだが、特徴はいたずら大好き人間だということである。優等生の兄パーシー（Percy）をからかっては怒らせているが、その言動は愉快で、憎めない」（木梨 2004, 43）と二人を紹介している。二人の特徴がいたずら好きで愉快な点が指摘されている。さらに作中では、二人と笑いが結びついていることが示される。*Harry Potter and the Philosopher's Stone*の中でHarryは自らが魔法使いであることを知り、Hogwartsへ向かうために列車に乗る。そこで出会うのが、親友となるRonを含めたWeasley家の面々である。その場面が、HarryとFredとGeorgeとの最初の出会いとなっている。Harryは、コンパートメントでRonの家族の話を聞く。その場面でHarryはFredとGeorgeについての情報も得ることとなる。

‘[...] Bill was Head Boy and Charlie was captain of Quidditch. Now Percy’s a Prefect. Fred and George mess around a lot, but they still get really good marks and everyone thinks they’re really funny. [...]’ (Rowling 1997, 75)

運動神経の面で突出しているCharlie Weasley、成績抜群のBill WeasleyとPercy Weasleyといった個性的な兄弟の中で、RonないしFredとGeorgeは育ってきたことが分かる。二人は成績も良く、Gryffindor寮のビーターという事実があることから運動も得意であると考えられる。しかし、後にCharlieはGryffindorの伝説の選手と呼ばれるほどの腕前であったことが判明し、BillとPercyは首席で卒業したことが明かされる。華やかな経歴の上の兄に比べると、二人は運動も勉強もそれなりにできると推測できるが、特別に何か突出しているとは言えない。優秀な兄弟の中で二

人の大きな個性となるのが、Ron が述べる “really funny” という点である。Harry と読者は、評判の面白い人物、周りに笑いをもたらす人物であるという印象を Fred と George に受ける。本シリーズの中で、Fred と George と笑いが密接な関係にあることがこの場面で垣間見える。Fred と George が登場すると、何か面白いことが起きるのだと予期できる仕掛けが施されている。さらに、シリーズを通して Ron よりも登場が少なく、性格が多面的に描かれることが抑えられるため、その役割が強調されることも指摘できる。故に、本論文で Fred と George に焦点を当て、二人が生み出す笑いに着目することにより、本シリーズの笑いとそこから発生するメッセージが明らかになるものと考えた。

本論文では、Fred と George がもたらす笑いの特徴として 1. 共有される笑い、2. 権威を揺るがす笑い、3. 意図して生み出される笑い、という三点を挙げる。第 1 章では、「笑わせる者」として笑いを周囲と共有する二人の立場を明らかにする。次の第 2 章では、Fred と George がたとえ権威者であってもからかいの対象にしている点を示す。権威者や周りに恐れられる者でさえ、笑いの要素を持つということを二人が周囲に提示している点も述べる。第 1 章と第 2 章では、Fred と George 以外の登場人物が生み出す笑いを最初に取り上げ、次に二人が生み出す笑いについて述べることとした。他の登場人物と二人の笑いを比較することにより、本シリーズで描かれる二人の笑いの特徴を浮かび上がらせる目的である。第 3 章では、第 1 章と第 2 章を踏まえ、意識的に周囲を笑わそうという二人の行為が、作中でどのような役割を担っているのかを考察する。そこから本シリーズにおける笑いとそこから見える本シリーズのメッセージを読み解いていく。

本文に入る前に、本論文で取り上げた笑いの理論について多少触れておく。第 2 章第 1 節では、トマス・ホップズの優越の理論に言及した。「笑いは他人にたいする優越感の表現」(モリオール 1995, 9) であるという考えが、笑いの優越の理論である。「笑いに関するホップズの説明は優越理論の古典的公式」(モリオール 1995, 13) とされてきた。本論文では、権威者が愚かな面を見せることで他者に優越感を引き起こし、笑いが催されているのではないかと考え、このホップズの論を扱っている。第 2 章第 2 節と第 3 章第 2 節で取り上げたジョン・モリオールは、『ユーモア社会をもとめて 笑いの人間学』の中で、笑いが「愉快な心理的転位」(モリオール 1995, 70) から生じると述べている。これは、既知のものにズレが生じることで生まれる、突然の心理的变化を意味する (モリオール 1995, 79)。モリオールは、著書の中で、「ズレを含んだある状況をおかしなものとしているとき、われわれはその状況の何のものにも実際的な関与をおこなっていない」(モリオール 1995, 188)、ユーモアが「距離をとりながらものごとをながめることを可能にしてくれる」(モリオール 1995, 189) と指

摘し、ユーモアが持つ解放の効果を考察している。ユーモアが持つ解放の効果は、笑いが恐怖の緩和をもたらすことを述べる際に第2章と第3章で扱った。第3章第2節では、アンリ・ベルクソンの論にも言及している。ベルクソンは、著書『笑い』の中で、「周囲の状況は絶えず変わっているのに、それを一向に加味しないで、従前と同じように対応」（増田 2016, 275-276）して失敗する人を人は笑うと指摘する。それを「自然な柔軟性しなやかさのなかに出現する機械的な硬直性こわばり」（増田 2016, 275）と呼び、著書の中で論じている。本論文では、『笑い』の中で、笑いが起こるポイントとして「心を動かされないこと」（増田 2016, 274）をベルクソンが挙げていることに着目した。「ある出来事をみて笑うためには、わたしたちはあくまでも傍観者、部外者として、その出来事に立ち会うのでなければならない」（増田 2016, 274）とベルクソンは指摘する。感情が入り込むと笑いが生まれえないという点は、恐怖心と笑いの関係を述べる際に言及した。

第1章 共有される笑い

はじめに、Fred と George がもたらす笑いの特徴の一つ、共有される笑いを取り上げる。河合隼雄は『対話する生と死 ユング心理学の視点』の中で、「笑いは、笑う者と笑われる者、という分離」（河合 2006, 65）を作ると述べている。笑いに「笑う者」と「笑われる者」という関係が形成されるとき、二人が生み出す笑いは、その二つの関係にさらに「笑わせる者」という立場を加える。「笑う者」「笑われる者」「笑わせる者」という三者が出揃う場面では、複数人での笑いの共有が生まれる。したがって、Fred と George は、複数人で共有される笑いをもたらす。その点を第1章第2節で述べる。第1章第1節では、まず二人以外の登場人物のもたらす笑いについて述べる。二人以外の人物が起こす笑いは、基本的には「笑う者」と「笑わせる者」の関係の中で生じるという点を示していく。

第1節 「笑われる者」としての登場人物

この節では、Fred と George 以外の登場人物が他者にもたらす笑いについて言及する。他の登場人物がもたらす笑いに注目し、Fred と George がもたらす笑いとの差異を明らかにする。

シリーズ中、Harry の周りでは、周囲から笑われる人物が複数人現れている。森番の Rubeus Hagrid や、Gryffindor 寮の Neville Longbottom、Ravenclaw 寮の Luna

Lovegood などである。Hagrid は、他者からは危険に見える動物に大きな愛情を寄せる傾向があり、それが引き金となって数々のトラブルを引き起こしている。そうした感性のズレを他者に笑われる姿が作中で見られる。以下に Hagrid が笑われる例を示した。魔法生物飼育学の授業に凶暴な Blast-Ended Skrewts を持ち込んだ Hagrid を Malfoy が馬鹿にした場面である。

‘And why would we *want* to raise them [the Blast-Ended Skrewts]?’ said a cold voice.

The Slytherins had arrived. The speaker was Draco Malfoy. Crabbe and Goyle were chuckling appreciatively at his words. (Rowling 2000, 174)

Hagrid は、Blast-Ended Skrewts を可愛がり、学生も自分と同じように気に入ってくれると信じ込んでいる。しかしながら、多くの人にとって危険な生き物にしか見えない。この感覚のズレに気づかない、愚かな者として Malfoy は Hagrid をあざ笑っている。

次に取り上げる Harry の友人 Neville は、常に劣等生で失敗を繰り返してばかりいる。下記の引用は、飛行の授業中に箒から落ちた Neville を Malfoy と Slytherin 寮生が馬鹿にして笑う場面である。

No sooner were they [Madam Hooch and Neville] out of earshot than Malfoy burst into laughter.

‘Did you see his [Neville’s] face, the great lump?’

The other Slytherins joined in. (Rowling 1997, 110)

劣等生の Neville は、Slytherin 寮生から見下され、嘲笑の対象となっている。

加えて、*Harry Potter and the Order of the Phoenix* から登場する Luna に注目する。彼女は実在しない生き物の存在を信じ込み、風変わりな装飾品を身に着けた少女である。周囲から浮いた存在である。見た目も性格も変わった面があることから、loony と呼ばれ、時に笑いの対象となっている。

Luna Lovegood had drifted over from the Ravenclaw table. Many people were staring at her and a few were openly laughing and pointing; she had managed to procure a hat shaped like a life-size lion’s head, which was perched precariously on her head. (Rowling 2003, 357)

Hagrid や Luna は周囲との感覚のズレを笑われ、Neville は自らのしでかす失敗や愚鈍な点を笑われている。自らは、笑われる要素のない真面目な言動を行っているつもりであろう。しかし、本人の考えとは対照的に、意図せず「笑われる者」となっている。「笑われる者」という立ち位置は、周囲からの人気や尊敬、羨望を得ることから彼らを遠ざけている。実際に Harry は、Neville、Luna と一緒にいるところを好きな女性に目撃されて落ち込み、もっとかっこいい仲間といるところを見てほしかったと感じている。しかし、Hagrid、Neville、Luna の三人は Harry が魔法界の人々に信用してもらえず苦しんでいたとき、Harry への信頼を臆せず表明している。彼らは風変わりな、数多くの失敗を重ねるなどの理由から嘲笑を受ける人物である。その一方で、純粋で心優しい人柄についても作中で描かれている。周囲から笑われるような一面は、彼らの特徴づける単なる一要素である。他の学生からの人気が乏しく、周りから蔑まれる存在であっても、内面の高潔な点にも目が向けられるような描き方がされている。その他、屋敷しもべ妖精の Dobby も上記の三人と同様、自ら意図せず笑いを提供している。Dobby は屋敷しもべ妖精の職務から逸脱した自分への罰として自傷行為を行う、色がちぐはぐな靴下を履く、Hermione が作った縫い物を一人ですべて身に着けるなど奇妙な言動を周囲に見せている。しかし、Dobby もまた、Harry に全力で協力することを厭わない存在、常に Harry の味方として描かれている。

Harry の友人たちは、本人が意図していないにもかかわらず、笑いの対象になっていることをこれまで述べてきた。それは、「笑う者」と「笑われる者」という関係を生み出している。

第2節 「笑わせる者」としての Fred と George

次に、Fred と George が「笑わせる者」として生み出す笑いについて述べていく。まず、Fred と George がもたらす笑いがどういったものなのかを以下の二つの引用から明らかにする。

‘It’s because of you, Perce,’ said George seriously. ‘And there’ll be little flags on the bonnets, with HB on them –’

‘– for Humungous Bighead,’ said Fred.

Everyone except Percy and Mrs Weasley snorted into their pudding.

(Rowling 1999, 52)

‘Charlie had to take the test twice,’ said Fred, grinning. ‘He failed first time,

Apparated five miles south of where he meant to, right on top of some poor old dear doing her shopping, remember?’

‘Yes, well, he passed second time,’ said Mrs Weasley, marching back into the kitchen amid hearty sniggers. (Rowling 2000, 64)

Fred と George が Percy や Charlie の失敗を話題にし、からかう。それに伴って周囲の人間が笑いを催す。この引用から分かるように、Fred と George がもたらす笑いは、人をおちょくる、からかうことから生み出される。そのため、Fred と George は自らが笑われる対象にはほとんどならない。弟の Ron も人をからかう場面が多々あるが、自分も笑われる対象になる機会も多く、二人とは異なっている。

また、二人が生み出す笑いは、前節で取り上げた「笑う者」「笑われる者」の関係とは相違がある。二人の笑いでは、「笑う者」と「笑われる者」という関係に「笑わせる者」という新たな立場が加えられる。本シリーズで人々に笑いを引き起こす登場人物は、意図して笑わせようとしていないとすでに指摘した。だが、それとは対照的に、Fred と George は他者を引き合いに出して他者を笑わせようとする意図された笑いを生み出す。二人が生み出す笑いには、「笑わせる者」（引用では Fred と George）、「笑う者」（引用では他の登場人物）と「笑われる者」（引用では Percy、Charlie）とのセットが基本的に必要となる。したがって、彼らが生み出す笑いには、複数の人間を要すると言い換えられる。複数での笑いの共有が含まれている。また、Fred と George は、「笑わせる者」でありながら、自らも自分たちの言葉に笑うことがあるため、「笑う者」にもなる。Fred と George のからかひやいたずらの対象になった登場人物も周囲と一緒に笑うことがあり、「笑われる者」が「笑う者」になる関係も時として生じる。河合隼雄は、「誰かを対象として、それを他の人間がみんなで笑いものにする、などというときは、その一人に対して全員が明確に『距離』があることを示すのだから、これははっきりと排除の表現になってくる」（河合 2006, 70）と述べる。引用の Percy へのからかひは、Percy を笑いの対象にしているが、両者の関係が決定的に悪化するような影響は与えていない。家族という信頼関係の中でのからかひと言える。作中、家族を馬鹿にした Malfoy に双子が危害を加えようとする場面が登場する。二人が家族に対して愛情を持っていることが分かるエピソードである。Fred と George は家族をからかひの対象にはするが、その根底には家族への愛情や信頼がある。からかひが完全な排除を生み出すわけではない。しかしながら、Percy が家族と決別すると、二人は Percy をからかひのネタにすることはない。批判の言葉を口に出すことはあるが、からかうことはしない。からかひの対象にすることは、二人にとって愛情や信頼の証の一つであろう。

これとは対照的に、からかうことによって嘲り、相手を傷つけようと意図するのが Malfoy である。

‘What’s that Weasley’s riding?’ Malfoy called in his sneering drawl. ‘Why would anyone put a flying charm on a mouldy old log like that?’

Crabbe, Goyle and Pansy Parkinson guffawed and shrieked with laughter. Ron mounted his broom and kicked off from the ground and Harry followed him, watching his ears turn red from behind. (Rowling 2003, 260-261)

Malfoy が Gryffindor 寮生をあざ笑うことにより、周りの Slytherin 寮生を笑わせる場面が数多く登場する。Fred と George がもたらす笑いとは異なる点は、笑う対象が主として敵とみなされる他者ということである。そのため、その笑いの攻撃性は強く、河合の指摘する「排除」の側面は大きい。しかし、Slytherin 寮生の共通の敵である Gryffindor 寮生をあざ笑うことにより、Slytherin 寮生の仲間意識を強くしている面も持っている。

第2章 権威を揺るがす笑い

本章では、Fred と George のもたらす笑いの特徴の一つ、権威ある者や恐怖を与える者をからかうという点について述べる。「ハリー・ポッター」シリーズでは、教員や保護者といった子どもにとっては権威ある立場の者が笑いの対象になっている。笑いの対象になることにより、その権威は影を潜め、権威者は権威的立場から引きずり降ろされる。第2章第1節では、権威者である登場人物が意図せず、自らの愚かな点を周囲に見せることにより、「笑われる者」となっている点を明らかにする。一方、Fred と George は、「笑わせる者」となって権威者や恐怖の対象をからかう。そこには周囲の人物を笑わせようという意図があり、恐れられる者も笑える要素があるという新たな視点を周囲に与える。この点を第2章第2節で述べていく。

第1節 権威的立場から引きずり降ろされる登場人物

この節では、Dursley 一家、Gilderoy Lockhart、Sybill Trelawney を取り上げ、作中、権威的立場の登場人物が笑いの対象になっている点を述べる。笑いの対象になることによって、その権威が弱まる効果が生まれることを明らかにする。

「ハリー・ポッター」シリーズでは、親戚に虐げられてきた孤児 Harry が、魔法界のヒーローであったというシンデレラストーリーを想起させる設定で物語が始まる。だが、シンデレラの継母や義理の姉にあたる Dursley 一家は、Harry に単に冷酷非道な仕打ちを行うだけではない。彼らは自らのおかしい言動を Harry に見せることにより、Harry にとって笑われる対象になっている。以下の引用がこの点を明らかにするものである。

As he [Harry] looked at Dudley in his new knickerbockers, Uncle Vernon said gruffly that it was the proudest moment of his life. Aunt Petunia burst into tears and said she couldn't believe it was her Ickle Dudleykins, he looked so handsome and grown-up. Harry didn't trust himself to speak. He thought two of his ribs might already have cracked from trying not to laugh.

(Rowling 1997, 29)

上記の引用では、息子の Dudley Dursley への Dursley 夫婦の過度な愛情が表現されている。この場面では、Harry に嘲笑ともとれる笑いを引き起こす。Dudley への溺愛を表す Dursley 夫婦のおかしい言動を見て、Harry は冷たい扱いをされても卑屈になりすぎず、客観的に笑える立場に移動できると言える。笑いは時に、優越の理論を持って語られてきた。トマス・ホップズは、「他人の中に不出来なところを見出して優越感に浸る場合」(ホップズ 2014, 103) に笑いが起こると指摘している。Harry は、Dursley 家に引き取られ、冷たい仕打ちを受けてきた。しかし、彼は虐げられる者でありながら、自分自身で自分を蔑むことなく、自己への肯定感を失くさずに生活している。それは、Dursley 一家がこうした表現で描かれることで、絶対的な優位の立場に固定されず、笑いの対象になるからだと言える。笑えることは、虐げられるという Harry の立場でありながら、Harry に優位的立場を持たせていると言えよう。団野恵美子が指摘するように、「ハリーは魔法が使えなくても、暴力に訴えるのではなく敵を笑って権威を失墜させることで、精神面において優位に立つことができる」(団野 2006, 107) のである。

次に、Harry が Hogwarts で出会った教員を取り上げる。Dursley 一家から離れた後も続々と Harry の周りには滑稽な人物たちが現れる。下記の引用は、闇の魔術に対する防衛術の新任教師 Gilderoy Lockhart の授業である。

'Freshly caught Cornish pixies.'

Seamus Finnigan couldn't control himself. He let out a snort of laughter which

even Lockhart couldn't mistake for a scream of terror.

'Yes?' he smiled at Seamus.

'Well, they're not – they're not very – *dangerous*, are they?' Seamus chocked.

(Rowling 1998, 79)

Gilderoy Lockhart は、数々の著作に自らの功績を記し、過剰な自己愛を持つ人物である。しかし、著作で書かれる偉業とは対照的な無能な姿を Harry 含めた学生に何度も見せている。その姿は滑稽で学生の笑いの対象になっている。Lockhart の他にも、占い学の教員 Sybill Trelawney も学生の笑いの対象となっている。

'[...] ... I think I am right in saying, my dear, that you were born in mid-winter?'

'No,' said Harry, 'I was born in July.'

Ron hastily turned his laugh into a hacking cough. (Rowling 2000, 177-178)

Trelawney は、占いを専門教科とする教員でありながら、自らの予想を大きく外している。それによって Ron に笑われている。Lockhart や Trelawney は、随所でまぬけな姿や失敗した姿を Harry や学生に見せつける。けれども、Dursley 一家と同様、本人は、他者を笑わせようという意図はない。本人の意思に反して、笑いが周囲の人間にもたらされている。河合隼雄は、『対話する生と死 ユング心理学の視点』の中で笑われる対象とその対象を笑う人間の関係に言及している。「笑いは、笑う者と笑われる者、という分離があり、その意味において、何かを『対象化』するという心のはたらきが必要となる事実が存在している、と思われる」(河合 2006, 65)。「対象化」とは「自と他とははっきりと分けて、自が他を『対象』として見る」(河合 2006, 65)ことである。Dursley 一家を笑うことは、彼らの保護者という権威的な立場や Harry の虐げられる立場を真正面から受け取れることを回避させる。Harry は物事を俯瞰して見ることができ、現在の状況に心を真剣に砕くほどには囚われなくなる。

Dursley 一家、Lockhart、Trelawney がもたらす笑いは、「笑う者」(Harry やその他学生)と「笑われる者」(Dursley 一家、Lockhart、Trelawney)の関係を形成する。彼らが持つ、欠点とも受け取れる愚かな点、それに伴う奇妙な言動が Harry や読者に晒される。そのため、親代わりの保護者、学校の教員という権威ある立場であるにもかかわらず、笑いの対象となり、絶対的な恐怖、克服できない強者という位置から引きずり降ろされる。

第2節 権威的立場を笑いの対象にする Fred と George

本節では、Fred と George が権威ある者、恐れられる者もからかいの対象にしていることを示す。二人が笑いの対象とする Ministry of Magic や Voldemort は、第2章第1節で取り上げた登場人物とは異なり、笑われるような愚かな点を見せていない。しかし、Fred と George がからかうことで、権威ある者、恐れられる者の笑える面が周囲に明らかになる。権威者への新たな視点が二人の笑いによって周囲の人物に与えられることを以下で述べる。

第1章第2節では、Fred と George が Percy の監督生 (prefect) という立場をからかっている場面を引用した。監督生という立場は、社会的に名誉ある役目であり、その役割を持った人物に権威や名声を与える。しかし、Fred と George にとっては、そうした名誉ある役職もからかいの対象となる。Percy が監督生に選ばれたときと同様に、Ron が監督生になると、二人は Ron を繰り返し茶化している。双子はいたずら専門店の経営を志しており、そのため学校を中途退学している。自らの将来の設計を明確に持ち、その夢を叶えるために資金繰りをする姿が描かれる。二人には、監督生や首席になったことで得られる学校での名誉、メリットは眼中にないであろう。監督生になった兄弟をからかうその行動には、監督生になった兄や弟への嫉妬心は感じられない。彼らにとっては、社会的評価が高い立場も単なるからかいの対象の一つである。

からかうということは、人や物事が持つ様々な面から自らが面白いと思う側面を引き出すことを意味する。たとえそれが、多くの人から恐れられる対象であっても、二人は、面白いと思われる側面を見つけ出し、それを他者に提示する。例えば、You-Know-Who (「例のあの人」) を文字った U-No-Poo (「ウンのない人」) という商品が二人の経営するいたずら専門店で販売されている。それを見た Ron と Harry が笑っている場面が物語中に挿入されている。Voldemort と Death Eater を茶化した他の商品として、Edible Dark Marks (「食べられる闇の印」) も販売されている。さらに、Ministry of Magic からの過干渉を Hogwarts が受けている際には、Fred は Ministry of Magic を茶化した発言もしている。こうした権威ある者が笑いの対象になることは、先ほど述べた Dursley 一家や Lockhart がもたらす笑いと同様である。また同時に、Voldemort のような恐怖の対象となる相手と自らとの間に距離を置き、「対象化」して相手の絶対的優位の立場を崩す。そのため、自らや周囲の人間に恐怖の緩和をもたらす面があることが指摘できる。ジョン・モリオールは、笑いがもたらす一つの側面として、笑いが束縛から逃れる手段であることに言及している。

ユーモアは政治的抑圧に直面したときばかりでなく、社会のしきたりにたいしても解放的な効果を発揮する。ユーモア感覚をもって自文化をながめるとき、われわれはそれが自然なやり方であると自明視しがちな自分たちの慣習を、多様なありうるやり方のひとつにすぎないものと見ることができるようになる。

(モリオール 1995, 187)

笑いは、物事の面白い面を発見したときに引き起こされる。笑いが起こるには、これまでとは違う見方で物事を見ることが必要である。政治や社会的な抑圧に苦しむ人々が、その苦しみの原因を今までとは異なる側面から眺める。それによって、自らを辛い目に合わせる対象を客観視し、一歩引いた状態で認識をする。眼前の苦しみに完全には囚われることなく、解放される効果が笑いにはある。これまでと異なる物事の見方をするためには、想像力を要する。Fred と George がもたらす笑いには、他者から笑える要素を見つけ出す想像力が欠かせない。彼らは、笑いを提供する傍ら、笑いに伴う恐怖の対象への新たな見方、考え方も他者に提示していると言える。

第3章 意図して生み出される笑い

第1章、第2章では、他の登場人物がもたらす笑いとは Fred と George がもたらす笑いを比較し、二人の笑いの特徴を見てきた。「笑われる者」である登場人物が意図せず笑いを提供している反面、Fred と George は「笑わせる者」として意図して他者に笑いをもたらしめていることが明らかになった。第3章第1節では、彼らが和やかな雰囲気や周囲にもたらす場面や彼らのいたずら専門店という仕事を取り上げ、二人が意図して周りに笑いや明るさを提供している点を述べていく。第3章第2節では、明るい雰囲気や笑いを周囲にもたらそうという意識的な行動が、「ハリー・ポッター」シリーズでどのような役割を彼らに与えているのかを明らかにする。

第1節 周囲を明るくする Fred と George

作中、Fred と George は、人をからかうという行為以外にも、周囲を楽しませようと行動している。例えば、Weasley 家や Gryffindor 寮で花火を爆発させるという場面である。夏休みの最終日や、学期はじめという要所要所で周囲の人間を巻き込み、盛り上げ役を買って出ている。彼らは、周囲を明るくし、笑いを引き起こす起爆剤のような存在である。死や恐怖も笑いと共に盛り込まれて描かれる本作に明るさが

もたらされる一端を担っている。

二人が暗い雰囲気の中に明るさをもたらす例は、最終巻にあたる *Harry Potter and the Deathly Hallows* でも見られる。Harry に変身した George が、Harry を攻撃しようとしていた敵に耳に穴を空けられる。家に運び込まれた George の顔が血だらけになり、生きていいのか死んでいるのか、読者や Harry は不安を抱えながら次の展開を待つことになる。しかしそこで、George が穴のあいた状態を指す holey と聖人の holy をかけた冗談を交えながら、自らの無事を周囲に伝える。敵に攻撃され、生命が危うくなるという、一見暗く、深刻な場面である。しかし、George の冗談により、深刻な部分は影を潜め、周囲には暖かな雰囲気が流れる。彼らは、物語に明かりを灯していく存在でもある。これに対して、彼らが冗談を言わず黙っていると、二人がふざけることができないほど事態が深刻なのだと周囲の人物に伝わる効果がある。*Harry Potter and the Prisoner of Azkaban* では、魔法学校の owl 試験が近づき、Harry は、Fred と George が勉強している姿を見かける。その際、あの二人でさえ勉強しているのだと Harry は驚く。二人がふざけていない、真剣な場面が描き出されることにより、状況の深刻さがより一層際立つ効果がある。その他にも、Gryffindor の Quidditch のキャプテンが優勝カップを手に入れる望みを失いかけて非常に落胆するエピソードが好例である。そこではさすがの Fred と George も黙り込むという描写があり、二人が静かになる、冗談も言えないくらいの事態なのだという状況が効果的に表されている。

Fred と George がもたらす笑いは、Dursley 一家や Lockhart とは違い、自らや他者を笑わせようという明確な意図を含んだ笑いであると前述した。そうした意図的な笑いを彼らが生み出そうとしているという点は、彼らを選んだ仕事にも反映されている。二人は、Hogwarts を退学し、WWW (ウィーズリー・ウィザード・ウィーズ) という魔法いたずら専門店の経営を始める。以下の引用は、二人の発明品であり、食べたらかナリアになるという菓子が登場する場面である。

Just then, Neville caused a slight diversion by turning into a large canary.

'Oh - sorry, Neville!' Fred shouted, over all the laughter. 'I forgot - it *was* the custard cream hexed -'

Within a minute, however, Neville had moulted, and once his feathers had fallen off, he re-appeared looking entirely normal. He even joined in laughing.

(Rowling 2000, 320)

菓子を食べた Neville が周囲の学生に笑われ、Neville も一緒に笑ってしまう。魔法のいたずら商品は、購入者が商品を使うことにより、その場に笑いがもたらされるこ

とが容易に想像できる。商品を通して笑いを提供することが二人の仕事なのである。こうした二人の職業、仕事から見ても、二人が笑いを故意に生み出そうとする意識が見られる。

第2節 恐怖を緩和させる Fred と George

第3章第1節で、Fred と George が笑いを故意に生み出し、周囲を明るい和やかな雰囲気に行っている点を述べた。第2節では、彼らが意識的に笑いを生み出す点が、作中どういった役割をしているのかを恐怖の緩和という側面から見ていく。

まず、主人公の Harry が二人の生み出す笑いをどう見ているのかについて述べる。Fred と George がもたらす笑いは、ただ単に周りを楽しませるだけではない。主人公の Harry は二人が周囲に与える笑いの重要性を見抜いている。以下の引用は、Voldemort が復活した直後、Hogwarts から Muggle の世界へと帰る Harry の発言である。Harry は、自らのお金を Fred と George に渡し、それをいらずら専門店の経営資金にしてほしいと頼む。戸惑う二人に対して、Harry は資金提供する理由を説明する。

‘[...] But I could do with a few laughs. We could all do with a few laughs. I’ve got a feeling we’re going to need them more than usual before long.’

(Rowling 2000, 635)

今後、闇の陣営によって魔法界が恐怖にさらされることが予想される状況下で、Harry は笑いが必要だと述べる。ここでは、恐怖への対抗、恐怖を和らげるものとしての笑いが扱われている。苦境に立たされる自分や周囲の魔法使いに笑いをもたらしてくれると考え、Harry が頼ったのが Fred と George である。いらずら専門店の経営は、商品を通して笑いを提供する仕事であると前節で述べた。Harry は、店の運営を手助けしようと思い出ており、二人のもたらす笑いに協力しようとしている。笑いを偶然ではなく、故意に、意識的に生み出す役割の Fred と George が、暗雲立ち込める魔法界、Harry の周囲の人々にとって助けになると Harry 自身が考えているからである。本シリーズにおいて、二人が笑いを生み出す役割を強く担っていることは、Voldemort 復活によって最も苦しい立場に立たされる Harry が二人に笑いを託したことによって示されている。Fred がその役目を *Harry Potter and the Deathly Hallows* の中で果たす場面がある。

‘Agreed,’ said Fred. ‘So, people, let’s try and calm down a bit. Things are bad enough without inventing stuff as well. For instance, this new idea that You-Know-Who can kill with a single glance from his eyes. That’s a *Basilisk*, listeners. One simple test: check whether the thing that’s glaring at you has got legs. If it has, it’s safe to look into its eyes, although if it really is You-Know-Who, that’s still likely to be the last thing you ever do.’

For the first time in weeks and weeks, Harry was laughing: he could feel the weight of tension leaving him. (Rowling 2007, 359)

上記は、Harry が Ron と Hermione と一緒に、旅の途上で聴いたラジオでの Fred の言葉である。三人の旅には大きな危険が付きまとい、途中で仲間割れを起こして Ron が離脱するなどの陰鬱な雰囲気が伴うものであった。だが、Fred の冗談をラジオ越しに聴いた Harry は久しぶりに笑い、晴れやかな気分を味わう。苦境の中で、笑いが重たい気分を変化させる好例である。恐怖に対置されるのは笑いであるという本シリーズで垣間見える考えは、他の場面でも描かれている。*Harry Potter and the Prisoner of Azkaban* では、Boggart という魔法生物が登場する。その特徴は、人が最も怖いと思うものに変身することである。Boggart にどのように対処すべきなのかは、次の引用で分かる。

‘The charm that repels a Boggart is simple, yet it requires force of mind. You see, the thing that really finishes a Boggart is *laughter*.’ (Rowling 1999, 101)

Boggart を撃退するもの、それは笑いである。この場面は、恐怖は笑いで克服できるのだという本シリーズから窺える考えの一例である。笑いに関する考察として、モリオールは、笑いと精神病患者との関係を以下のように述べている。

ひとびとが自分の精神問題と格闘しているとき、自分のおかれた状況に笑うことができるようになれば、それはよいしるしである。なぜならそれは、いまや彼らが自分の問題を、問題のうちに封じこめられた立場からではなく、ある距離をおいて見られるようになったことをしめすものだからである。何かについてどれほど笑うことができるかで、それにたいする客観性がどれほどあるかがわかるのであって、そうした構えの変化はものの見方の大きなちがいとなってあらわれるわけである。(モリオール 1995, 195)

笑いは、物事へのこれまでの固定された見方を変え、客観性を得ることから生じる。対象への恐怖心に支配されない、距離をとった視点が笑いを通して得られる。Boggartの場面では、Nevilleの前に彼の恐怖の対象 Severus Snape が現れる。だが、Neville は、Snape が Neville の祖母の服装をしていることを想像し、二人を結びつけることにより、笑いへと変化させている。そして、自分の恐怖心を弱めることに成功している。バルクソンは、「笑いは情緒とは相容れない」（バルクソン 1976, 129）、同感、恐怖、憐憫を感じさせたら笑えない（バルクソン 1976, 129）と述べる。主観的感情に囚われず、客観的な立場で対象を見ることで、恐怖心を持つ人物が恐怖に飲み込まれにくくなる。恐怖の対象と距離を置き、「対象化」することにより、その恐怖の度合いが軽減されるのである。バルクソンが示す感情が入り込むと笑いが生まれないう例も作中で描かれている。*Harry Potter and the Order of the Phoenix* で、Death Eater によって廃人にされた両親を見舞う Neville と Harry は出会っている。自らの子どものことも認識できない両親と接する Neville を見た Harry は次のように考えている。

Neville looked around at the others, his expression defiant, as though daring them to laugh, but Harry did not think he'd ever found anything less funny in his life. (Rowling 2003, 455)

これは、バルクソンの指摘する憐憫の例であろう。決して笑いが伴うことはない。では、何故、Fred と George が生み出す笑いが恐怖に対抗するものとして選ばれたのであろうか。下記の引用からその答えを探る。

'[...] I say to you all, once again – in the light of Lord Voldemort's return, we are only as strong as we are united, as weak as we are divided.

Lord Voldemort's gift for spreading discord and enmity is very great. We can fight it only by showing an equally strong bond of friendship and trust. [...]

(Rowling 2000, 627)

上記場面は、Voldemort が蘇った後、全校生徒を前にした Albus Dumbledore の言葉である。Voldemort は、魔法界を手中に収めるため、魔法使いが互いに疑心暗鬼になり孤立することを求めていると Dumbledore は述べる。相互の信頼と友情が薄れ、結束が保たれないことにより、人々は孤立していく。個人の力は複数人で結束した力

よりも弱く、撃退されやすい。精神的にも肉体的にも虚弱になる。これを受けて、FredとGeorgeがもたらす笑いの特徴の一つは複数人で共有される笑いであると先に指摘した。彼らの笑いの特徴は、相互の緊張を解き、共通の楽しい場を意図的に作ることである。周囲の人々と笑い合う行為は、友情を強め、信頼を紡ぎ、結束を強める。不和と敵対感情を蔓延させることとは反対の行為であろう。「ハリー・ポッター」シリーズでは、笑いとは複数人で共有するべきものである。その考えを象徴するのがFredとGeorgeである。二人が双子であるのは、お互いに「笑い合う」こと、「複数」での「笑い合い」の体現とも考えられる。

おわりに

本論文では、FredとGeorgeがもたらす笑いに着目した。二人が故意に笑いを生み出し、周りを「笑わせる者」の役割を担っていることを考察してきた。FredとGeorgeは、「笑われる者」が持つ笑いの要素を顕在化し、周囲に笑いを引き起こす。笑いの導き手と言える。二人の役目に着目すると、「ハリー・ポッター」シリーズでは、複数人での笑いの共有が重要であるとの考えが見えてくる。なぜなら、本シリーズで求められる笑いとは、Voldemortが望む互いに疑心暗鬼になり孤立することと反対の行為であるからである。FredとGeorgeが生み出す他者との笑いの共有は、信頼や結束を強めることに繋がる。二人は他者を巻き込む笑いを意識的に作り出し、周囲を楽しませ、喜ばせる。他者と共有される笑いは結束力という形となって、敵に立ち向かう際に追い風となってくれる。その風を生み出すのがFredとGeorgeである。

(本論文は、2018年7月31日に開催された第61回白百合女子大学児童文化研究センター主催研究会第7回構成員研究発表会で行った発表「『ハリー・ポッター』シリーズにおける笑い——フレッドとジョージの場合——」に加筆修正を行ったものである。)

使用テキスト

Rowling, J.K. *Harry Potter and the Philosopher's Stone*. London: Bloomsbury Publishing, 1997.

—. *Harry Potter and the Chamber of Secrets*. London: Bloomsbury Publishing, 1998.

- *Harry Potter and the Prisoner of Azkaban*. London: Bloomsbury Publishing, 1999.
- *Harry Potter and the Goblet of Fire*. London: Bloomsbury Publishing, 2000.
- *Harry Potter and the Order of the Phoenix*. London: Bloomsbury Publishing, 2003.
- *Harry Potter and the Half-Blood Prince*. London: Bloomsbury Publishing, 2005.
- *Harry Potter and the Deathly Hallows*. London: Bloomsbury Publishing, 2007.

引用文献

- 河合隼雄『対話する生と死 ユング心理学の視点』大和書房（だいわ文庫）、2006年
- 北爪佐知子「研究のトポス ハリー・ポッターのファンタジーの世界とユーモア」『渾沌 近畿大学大学院文芸学研究科紀要』（近畿大学大学院文芸学研究科編）第1号、近畿大学大学院文芸学研究科、2004年、227-249頁
- 木梨由利「『ハリー・ポッター』の魅力を探る」『金沢学院大学紀要 文学・美術編』（金沢学院大学紀要委員会編）第2号、金沢学院大学、2004年、39-52頁
- 小谷真理『ハリー・ポッターをばっちり読み解く7つの鍵』平凡社、2002年
- 団野恵美子「ハリー・ポッターと魔法を使わない世界」『姫路獨協大学外国語学部紀要』（姫路獨協大学外国語学部編）第19号、姫路獨協大学外国語学部、2006年、101-116頁
- 富山太佳夫「イギリス・ファンタジーの系譜 ハリー・ポッターはどこから来たか」『英語教育』（大修館書店『英語教育』編集部編）第52巻第8号、大修館書店、2003年、10-12頁
- 中村圭志『これから「ハリー・ポッター」の話をしよう：20歳になってわかる寓意文学の哲学』サンガ、2010年
- ベルクソン、アンリ『笑い』林達夫訳、岩波書店（岩波文庫）、1976年
- ホップズ、トマス『リヴァイアサン1』角田安正訳、光文社（光文社古典新訳文庫）、2014年
- 増田靖彦「解説」アンリ・ベルクソン『笑い』増田靖彦訳、光文社（光文社古典新訳文庫）、2016年、268-307頁
- モリオール、ジョン『ユーモア社会をもとめて 笑いの人間学』森下伸也訳、新曜社、1995年